

林業経済研究所創立 70 周年記念企画 リレーインタビュー⑤

私の研究史 〈村嶋 由直〉

聞き手：田中 亘*、藤野正也**、早船真智*、嶋田栄樹**
 日 時：2016 年 12 月 27 日
 場 所：滋賀県大津市市民活動センター

はじめに

私は 1935 (昭和 10) 年に滋賀県大津市で生を受けた。奈良・平安の古からの交通の要衝であり、三井寺や石山寺など名所旧跡も多い町ではあるが、幼少期はそのようなことにはあまり関心がなかった。朝鮮戦争のニュースが巡る中、滋賀県立大津高等学校 (現・膳所高等学校) に入り、これからの日本はどうなるのだろうかと思う日々を過ごしていた。

社会経済分野に興味を持つようになったきっかけはいくつかある。高校 1 年生の時であったと思うが、一般社会 (今でいう現代社会) の授業の中でケインズ経済学の基礎的な説明があった。この授業を行った高田先生はマルクス経済学全盛時に京都大学経済学部を卒業された方だったが、このような出会いがあったというのは非常に素晴らしいことだった。また、世界史の授業で聞いたヨーロッパの近代史やアフリカの植民地問題などにも大変興味を引かれた。もう 1 つは大学入学前後だったが、父親から明治初期にここでも入会権を巡る事件があったことを聞き、祖父が若い時に関わっていたらしいことを知って、社会や人間に非常に興味を持つようになった^(注)。

大学院修了まで

高校卒業後は京都大学農学部へ進学した。1、2 回生の教養部時代は岩波新書『資本主義経済の歩み』や『農業問題入門』から刺激を受けたが、ぼーっとして過ごしていた。当時の農学部は 3 回生から各学科へ配属される制度を取っていた。元々数学が得意で農業工学にいかうと思っていたので、教養部時代に「図学」を履修した数少ない農学部生で

* 森林総合研究所 林業経営・政策研究領域

** 京都大学大学院農学研究科 生物資源経済学専攻

注：誕生地 (村嶋記)

生地は旧北大路村 (「自然村」にあたる) で、明治の市町村制によって石山村に、さらに大津市に合併。江戸期には膳所藩領で、天保郷帳では 630 余石、また隣村とともに勢多橋 (都の防衛上の要衝、瀬田の唐橋) の維持管理を勤めていた。村域は、東西が広く、南北は狭く、ここを西から東に三田川・森越川が流れる。この東隅に集落＝居住空間がある。この外側に田畑が広がり、さらにその外 (西) に草生地・柴地・山が広がる。奥山は千頭岳 (600 m) に続く (明治初め国有林に囲い込まれる?)。明治初めの戸数は 73、人口 375 人。民業は農 63 戸、商 4 戸、雑業 6 戸。明治 8 (1875) 年の貢租は 1,270 円余 (地価金額 42,000 円)。貢租地には柴地・藪・草生地 10 町余が含まれていた。この自然や産業構造は、1920 年代に北隣の栗津原にレーヨン工場 (東洋レーヨン、旭ペンベルグ絹糸) が進出し、変化し始める。しかし、工場に勤める人もあったが、地元民が出るのは少なかった。古くからの住民は農業に勤しんでいたのが幼少期の記憶で、景観も日本社会の原風景をとどめたものであった。なお、上記の事件は森林を巡る官民闘争であったと想像されるが、これに関する史料は見つかっていない。(『新註近江輿地志略』、『近江国滋賀郡誌』)

主な経歴

年	月	経歴
1935年	12月	滋賀県大津市に生まれる
1959年	3月	京都大学農学部林学科卒業
	4月	京都大学大学院農学研究科修士課程（農林経済学専攻）入学
1961年	3月	同課程 修了
1963年	4月	財団法人林業経営研究所入所
1967年	4月	東京大学助手 農学部
1970年	8月	信州大学助教授 農学部 着任
1980年	7月	岩手大学助教授 農学部 着任
1986年	3月	京都大学農学博士（論農博 1234号）
1989年	4月	林学賞（日本林学会）
1990年	5月	京都大学教授 農学部 着任
1997年	4月	同上 大学院農学研究科に配置換え
1999年	3月	新潟大学教授 農学部 着任
	3月	京都大学名誉教授の称号授与
2001年	4月	鳥取環境大学教授 環境学部 着任
2008年	4月	同大学名誉教授

あった。しかし、高校の先輩だった菅原聡氏（当時大学院 DC）に「林学は非常に幅広い分野で面白い学問だから」と誘われたため、林学を専攻することにした。

林学に入ってから、砂防か林政か専門をどうするか迷うところもあったが、高校時代の社会経済分野に対する関心が決め手となって、林政に進むことを決めた。たまたま受講していた半田良一先生の講義が、木材価格形成に関する話（野村勇氏との論争）や最適伐期齢理論など難解なテーマであったので、少し考えてみようと思い、半田先生の部屋を訪ねた。半田先生と話をすることで、結果として、自分は社会や経済に関心があるというところに落ち着き、林政学の半田先生の指導を仰ぐことになった。京都大学では林政学講座は農林経済学科に所属している。そこで、林政学講座のゼミに参加し、社会科学の研究を進めていくことになった。ゼミに所属したのは林学から私1人、演習は農林経済学科所属の2人くらいが参加するこぢんまりとしたものだった。当時の林政学の講義は東大の島田錦蔵先生から春と夏に集中講義として受けた。『林政学概要』の中からご自身の専門の入会問題を強調されていたが、事例など非常に多様性がある理解するには大変苦労した覚えがある。

私の研究の取っ掛かりは3つある。1つ目は半田先生が講義中に提示した二範疇林業論である。学会では林業地代論に関連して議論されたが、私にとっては採取林業と育成林業の2つが「同時・異場所併存」という理論的解明に興味を覚えた。

2つ目は、経済原論の講義の中で学んだ資本の流動過程である。資本の動きは生産過程と流過程からなる。これを林業研究に当てはめると、従来の林業研究の対象は、「植えて育てて伐る」というサイクルに関するもの（＝二範疇林業論）であった（図の a）。つまり、生産手段（Pm）と労働力（A）から新たな商品が生み出される過程（…P…）を研究対象としていた。私に関心を持ったのは資本の循環のために不可欠な過程（G - W、W' - G'）、つまり「作ったものがどう価値実現するか」だった（図の b）。

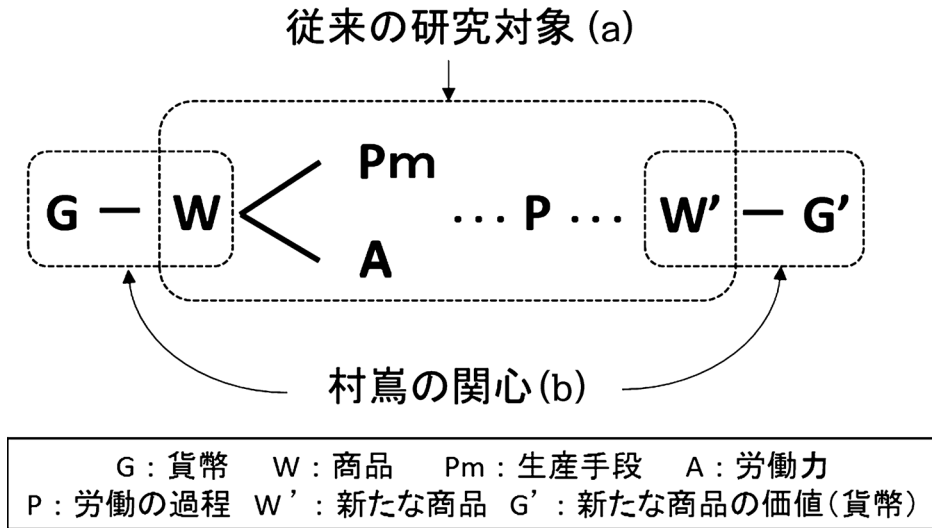


図 価値の生産過程

3つ目は多くの先行研究から学んだことである。半田先生からの助言で多くの本を読み、資本主義社会の法則が林業をも支配していること、その上で林業独自の経済法則を発見しなければならないことを学んだ。これらがあったことから、私の研究姿勢は日本経済の中の林業・木材問題を考えること、それが研究生活の一貫した問題意識になった。

卒業論文は「森林組合についての一考察—実態調査をもととして—」というテーマで、森林組合の実態を調べ、研究の進め方を学んだ。この中で京都府の須知森林組合（現・京丹波森林組合）の現地調査を行うとともに、林野庁が研究者を動員して全国の森林組合がどのように活動しているかを調べた「森林組合実態報告書」を10冊ほどサーベイし、森林組合の実態を明らかにした。当時、1950年代の森林組合は休眠状態の組合が多く、活動していても林野転換に関わる補助金の支給や指導事業にほぼ限られていた。

大学院からは農林経済学専攻に進学した。同期生は4人で、林政学講座は上にも下にも私だけ。大学院には深尾清造氏が1年遅れて入ってきた。1960年頃は林業に関する基礎調査の依頼が林野庁から大学等研究機関に寄せられることが多く、京大農林経済学研究室にも多くの調査依頼が寄せられていた。それらは後に集約されて『日本林業発達史』として結実されたもので、自分はそれに関わった最後の世代となったといえるだろう。調査をたくさん抱えておられた半田先生に連れられて九州各地や吉野林業地帯での調査等に同行し、多くのフィールド調査の機会を得た。振り返ると、これらの経験はその後の研究生生活の宝であった。この一環で行った木曽材流通調査は、「木曽材流通機構の考察—名古屋木材市場を中心に—」というテーマで修士論文としてまとめた。この時の調査の中で強く感じたのは、天然林は樹種が豊かで、同一木材といっても利用は多様で、幅広い林産業が発達していることであり、この実態を木曽谷、名古屋の調査を通じて学んだ。その後、木材流通の変化を観察する定点として木曽には定期的に訪れることになる。

日本全国を歩き回る (1960 ~ 70 年代)

大学院修了後は、財団法人林業経営研究所 (1963年~)、東京大学助手 (1967年~)

を経て信州大学助教授（1970年～）となる。林業経営研究所では森巖夫、赤井英夫、小川誠、奥地正、村尾行一、阿部正昭諸氏らと国有林に関する研究を行った。また、当時は林業の基本問題と基本対策を巡る議論が盛んに行われており、その議論の輪に参加できたことは大きな財産となった。東大在職時はちょうど大学紛争が盛んだった頃で、落ち着いて研究を進めることはなかなか難しかった。この頃の成果の1つとしては、塩谷勉・黒田迪夫編著『林業の展開と山村経済』（1972）の中の「戦後木材加工資本発展と木材市場」が挙げられる。

また、この当時、木材の輸入自由化が進み、外材の流入によって日本の木材流通は転換点を迎えていた。木曾に加え、奈良県の桜井を定期的に訪問するようになり、その2か所を定点として観察することで、木材流通の変化をしっかりと見て取ることができた。国有林によって成り立つ木曾と、民有林によって成り立つ桜井を比較すると、木材の供給体制が全く異なるにもかかわらず、共通して原木市場が産地で木材を分配する上で大きな役割を果たしていることに気がついた。この流通の重要性への着眼が自分の木材流通研究の興味の原点であり、展開していく上での軸となった。一方で、東京、名古屋、清水、和歌山、広島など日本全国の木材輸入港を調査で歩き回り、「広島市場における木材流通の現状と問題点」（1970）、「輸入木材流通条件調査結果概要」（1970）、「商社の外材販売方法に関する調査」（1971）、「本国びき米材製材品流通の実態と問題点」（1971）などの報告書を執筆した。また、外材の大量輸入体制に対応した産地づくり調査にも参画し、「いわき木材団地レイアウト計画調査報告書」（1969）、「石川県木材流通構造調査」（1970）、「東京港製材ふ頭整備計画調査」（1972）などの報告書を執筆した。この時期は安藤嘉友氏とともに調査し、まとめたものが多い。山国の信州にいたにもかかわらず、菅原聡教授にご配慮いただき、各地の港を回ることはできたことはありがたかった。

また、林業経済研究所の委託調査から、当時政治経済研究所員だった岡村明達氏と研究を行う機会を得た。報告書として「昭和49年度木材市場実態調査」（1975）をまとめ、さらに岡村氏の指導の下で安藤嘉友、依光良三氏と『木材産業と流通再編』（1976）を執筆し、実態に基づく流通理論を構築していった。1978年には3年間の科研成果として、赤羽武、鷺尾良司、奥地正氏らと『日本経済と林業の山村問題』を世に問うた。

調査中の思い出は数多くあるが、外材の流通の様子は国産材のそれとは全く別のものがあった。清水や広島港で木材専用船が大量に同じくらいの径級の丸太を積んで停泊している姿を見ると、どのような木材生産が行われているのかという興味が湧くとともに、こんなに木材を伐採して外国の森林は大丈夫なのかという不安を覚えるようになった。とはいえ、当時はまだ国産材価格も上昇中であり、外材も圧倒的優位な状況を確認する前であった。山側の調査ではいくらでも話を聞くことができた。山持ちさんは、1町歩の立木代が1,000万円とか、どれくらい儲かったとか、自慢話を披露されていた。九州では調査の始めから焼酎を薦められることもあった。その意味では山の景気の良さを実感できたが、1970年代半ば以降はそのようなことがなくなり、山の景気の低迷を肌で感じるようになった。外材輸入港での輸入に関わる仕組みの調査では近隣の製材工場にも話を聞いた。現在ほど交通網が発達していたわけではないので、1度の調査は1週間ほどかかった。それでも、話を断られたり、事実を隠されたりすることもなく、調査は順調であった。感謝したい。そう考えると、自分は調査をするには良い時代に生きていたのだろう。

念願の海外調査（1980年代）

1980年からは岩手大学の助教授に着任する。教授の船越昭治氏や岡田秀二氏とともに、

岩手県内を見て回るようになった。それまではどちらかというと原木市場や製材工場などをよく見ていたが、岩手では山から製材工場、さらには地域経済までを見渡すことができた。住田町の林家調査や県有林・公社の調査から多くの知見を得た。東北本線に沿ってポツポツと駅周辺で引き込み線を持った工場が操業している様は、木曾や桜井などのように大きな産業拠点、木材の街として発展している様相とは全く異なっていたが、東北の成熟しつつある森林構造を強く意識するようになった。そうすると、海外の木材資源大国の木材産業はどうなっているのか、比較分析に興味がますます湧いてきた。また、木材市場・流通研究や外材論・木材産業論を総括した学位論文「戦後木材産業の展開過程に関する研究」(1986) およびそれを書籍化した『木材産業の経済学』(1987) を執筆して一区切りがついたので、何とかして海外で実態を見ながら研究を行えないものかと思うようになった。もちろん、当時もいくつかの文献はあったが、やはり自分の目で確かめてみなければ納得はできない。

1987年9月、文部省在外研究として海外へ行く機会を得た。2か月という短期間であったが、短期間であるからこそ仕事に大きな穴を空けることなく行くことができた。出発する前には、ゼミ生と一緒に文献調査を行い、入念な準備をしたつもりであった。しかし、実際にアメリカ林業を目の当たりにすると、百聞は一見に如かず、その規模に大いに驚いた。木々は日本より大きく、ワシントン州では山元からタコマの港へ列車で丸太が延々と運搬されていた。「これでは、日本林業に勝ち目はない」と素直に思ったが、大規模に森林が伐採されており、その再生にどれほどの時間がかかるのだろうか、どうになってしまうのだろうか、という心配も募っていった。ただ、アメリカ南部の状況を見た限り、面積は広いものの樹高は日本と変わらず、日本も競争できそうな印象を受けた。アメリカ訪問の後、欧州共同体(現・欧州連合)の共通農業政策の林業版を調べるため、イギリス、ベルギー、スウェーデンを訪ねた。スウェーデンでは“Energy Forestry”を新しい farm crop として現場を案内され、木質バイオマスの産業化に驚いた。1987年のことであった。ここで得た知見については、アメリカでの成果は『現代アメリカの木材産業』(1988)として、ヨーロッパでの成果は「EC(欧州共同体)の林業政策」(1988)としてまとめた。

また、この時期は、農業経済学の川村琢監修『現代資本主義と市場』(1984)で「木材関連産業と木材市場」、鷲尾良司・奥地正編著『転換期の林業・山村問題』(1983)で「住宅政策の展開と木材問題」と「大企業の林業活動」を書いた。いずれも日本経済と林業あるいは木材の関係性を論じたものであった。

京都大学着任(1990年代)

京都大学に着任してからも海外林業に対する関心は続き、資源大国であるアメリカを支配している大企業、資本の動きを研究の対象と捉えた。また、森林と環境問題の関係にも関心を持つようになった。1992年から助手として着任した大田伊久雄氏などとともに北米を中心に、林業政策と環境政策と木材産業のつながりを分析していった。1994年度からは国際学術研究(課題:先進国の林産物貿易と森林管理・環境政策に関する研究)を行うことができ、『アメリカ林業と環境問題』(1998)はその集大成とあってよい。

また、京都大学着任からは、学生指導という点で責任ある立場になった。荒谷明日兒氏、加藤滋雄氏などがここで学位を取得した。現在、林政学研究室は森林経済政策学研究室に名称を変えているが、当研究室の現在の教授である栗山浩一氏も学部生の時にゼミに在籍していた。

先述のとおり、京都大学の林政学研究室は農林経済学科の一分野であったことから、自

ずと農経研究者とのつながりも増えていった。藤谷築次、稲本志良氏らとともに研究会を開催するなど、地域農林経済学会とのつながりも増えていった。その成果を含む『森と木の経済学』（2001）を後に大学生生活を総括するものとして公刊した。

鳥取環境大学、そして現在（2000年代）

1998年、盟友であった安藤嘉友氏が急逝した。安藤氏とは同級であり、同じ木材流通を研究するという共通点があった。そのため、東京で出会って以来、良き友であり良きライバルであった。安藤氏は留学生を指導していたので、これを引き継ぐため伊藤善雄教授からお声をかけていただき、1999年に新潟大学へ赴任することとなった。留学生を無事に送り出した後、2001年からは環境倫理学の加藤尚武氏などからの誘いを受けて、新設された鳥取環境大学へ赴任した。副学長を務めるなど大学運営に忙しい毎日を送り、各地を調査して回る時間はなくなった。

しかし、アメリカの林業・木材産業は大きな変革期を迎えていた。アメリカの木材産業は広大な林地を管理し、それを原料基盤に各種の木材関連施設を稼働させる垂直的経営統合企業であることに特徴があった。ところが、1990年代以降、TIMO（林地投資管理会社）やREIT（林地不動産投資信託）といった、まったく新しい会社が垂直的統合企業から林地を大量に購入していた。つまり、林地が金融資産として投資対象になっていたのである。この動きについては「米・木材巨大企業（VIFPCs）の森林経営からの撤退—機関投資家による投資拡大—」（2008）、「木材産業・市場の過去半世紀と展望」（2008）、「TIMO・REITと育林資本」（2016）などにまとめている。アメリカ経済の金融化の一環と捉えているが今の林業・木材産業を見通すことは困難であることから、これらの動向については今後も注視してゆかねばならぬと考えている。

現在（2010年代）

2008年4月に鳥取環境大学を退任してからは、生まれ故郷の滋賀県大津市に戻ってきた。ところが故郷に戻ってみると、地元のことを全然知らないということによりやく気がついた。もう少し地元のことを知りたい、という思いから、図書館や古墳、遺跡などを歩いて回っている。そういったものを見て回る中で、やはり興味が引かれるのは木材の使われ方であった。遺跡の発掘資料などを調べて、あれこれと思いを巡らせながら「傘寿」記念としてまとめたものが「古代人の森林資源利用—滋賀県内の「遺跡発掘調査報告書」から—」（2016）である。琵琶湖には100もの河川が流れ込み、その沖積地の周りに人々が住みついた滋賀県は、日本の縮図である。故郷について研究することができ、多少は故郷に恩返しのできたのではないだろうか。

なお、近く刊行される『三重県史 通史編 近現代1・2』に林業関連誌を執筆している（『同1』は既刊）。

終わりに

研究生活で楽しかったことを挙げるとすれば、やはり多くの人たちとの出会いがあったことだろう。東京へ出たことは、先にも述べたとおり大きな刺激となった。その後もいくつかの大学と土地を経ながらいろいろな出会いに恵まれ、学生諸君から刺激を受けたことによって、ささやかながら自分の研究を続けることができたように思う。

若い人にメッセージを残してほしいと言われているので、一言述べておこう。自分としては日本経済の中の林業・木材産業問題という問題意識、海外林業分析においても世界貿易の中に林業を位置付けて解明してきた。国内林業については、1970・80年代の市売市場（生産地・消費地）問題や木材産業問題には一定の提起をしたが、林業の課題には寄与できなかったと感じている。

1990年代後半以降、日本の林業・木材産業は新しい段階に入った。何よりも木材需要量の減退である。消費縮小期、加えて森林の環境財化の中で林業・木材産業構造の再編をどのような視点から考えるか、これが現下の課題と考えている。また、技術に関しても従来の延長上の技術発展から段階を画する新たな技術導入が花開いている。技術・経営システムに質的に大きな変化が起こっているのである。例えば、この変化を広島県のT木材株式会社に見る。同社の動きは「日本の木材産業の芽」のように感じられる。私はこの芽が、今後どのように林業を統合しながら育っていくのか、その道筋を明らかにすることはできなかった。現在の木材流通の研究者には、グローバル化の新しい段階に入った林業・木材産業の研究の深化をぜひ期待したい。

参考文献

- 村嶌由直「森林組合についての一考察—実態調査をもととして—」（1959）京都大学卒業論文
 村嶌由直「木曾材流通機構の考察—名古屋木材市場を中心に—」（1961）京都大学修士論文
 横山芳男、村嶌由直「いわき木材団地レイアウト計画調査報告書」（1969）日本工業立地センター
 安藤嘉友、村嶌由直「石川県木材流通構造調査」（1970）日本工業立地センター
 村嶌由直「広島市場における木材流通の現状と問題点」（1970）林野庁林産課
 村嶌由直、安藤嘉友ほか「輸入木材流通条件調査結果概要」（1970）林野庁経済課
 安藤嘉友、村嶌由直「商社の外材販売方法に関する調査」（1971）林野庁経済課
 赤井英夫、村嶌由直「本国びき米材製材品流通の実態と問題点」（1971）林野庁林産課
 岡村明達、安藤嘉友、村嶌由直、依光良三「東京港製材ふ頭整備計画調査」（1972）日本工業立地センター
 塩谷勉、黒田迪夫編著『林業の展開と山村経済』（1972）御茶の水書房
 岡村明達、安藤嘉友、村嶌由直、依光良三「昭和49年度木材市場実態調査」（1975）林業経済研究所
 岡村明達編著『木材産業と流通再編』（1976）日本林業調査会
 林業構造研究会編『日本経済と林業の山村問題』（1978）東京大学出版会
 鷺尾良司、奥地正編著『転換期の林業・山村問題』（1983）新評論
 川村琢監修『現代資本主義と市場』（1984）ミネルヴァ書房
 村嶌由直「戦後木材産業の展開過程に関する研究」（1986）京都大学博士論文
 村嶌由直『木材産業の経済学』（1987）日本林業調査会
 村嶌由直『現代アメリカの木材産業』（1988）日本林業調査会
 村嶌由直「EC（欧州共同体）の林業政策」『林業経済』No.479：23-27（1988）
 村嶌由直編著『アメリカ林業と環境問題』（1998）日本経済評論社
 村嶌由直『森と木の経済学』（2001）日本林業調査会
 村嶌由直「米・木材巨大企業（VIFPCs）の森林経営からの撤退—機関投資家による投資拡大—」『鳥取環境大学紀要』6：7-19（2008）
 村嶌由直「木材産業・市場の過去半世紀と展望」『林業経済』60（12）：11-14（2008）
 村嶌由直「TIMO・REITと育林資本」『林業経済』69（3）：17-26（2016）
 村嶌由直「古代人の森林資源利用—滋賀県内の「遺跡発掘調査報告書」から—」『林業経済』69（5）：1-15（2016）

インタビュー後記（嶌田）

筆者が初めて村嶌由直先生の名前を目にしたのは、半田良一編著『林政学』（1990）であった。同じ「嶌」を苗字に含む方を目にすることは珍しく、ましてや同じ林政という学問分野内でのことであったため、大変印象深かったことを覚えている。今回、その村嶌先生にインタビューをさせていただけることになり、改めて不思議なご縁を感じた。

本稿の内容はほとんどをインタビューに依拠して構成しているが、一部において村嶌先生が京都大学退任の際に作成した小冊子「ささやかな研究生活—京都大学を去るにあたって—」から了解を得て援用している。なお、価値の生産過程の図は会場の会議室にあったホワイトボードに描かれたものを筆者がリライトしたものである。

（文責：藤野正也・嶌田栄樹）